



男
が
み
痴
漢

い
さ
れ
た
読
な
ん
て
試
る
か

中学三年からボクシングジムに通い、高校でもボクシング部に所属する俺は、そこらの男子高生より、引きしまった筋肉質な体をしている。

制服を着ていても、格のチガイは明らかだし、坊主にピアスと、オラオラ系の見た目をして、同世代の男子はもちろん、大人の男も近よらず、目を合わせようとしなない。

はすが、このごろ、毎朝、通学の満員電車で俺は、男に痴漢をされていた。

そりゃあ、肘鉄を食らわして、屈みこんだところ、強烈アッパーをぶちかましKOしたかったが・・・。

ジムのトレーナーであり、俺の師匠に「ぜったいに、なにがあるうと一般人に手をだすな。ジムやリング以外で拳をふるったら破門にするぞ」と命じられているし。

騒ぎになって「あんなヤンキーのような子が痴漢されたの？」とまわりや警察官に白い目で見られたり笑われたり、学校でも噂が広まったら、結局、損をするのは俺のほうだし。

もし、相手が狡猾なヤツなら「ガラのワルイ子に恫喝された！」と見た目からの偏見を煽って、被害者と加害者の立場を逆転しかねず、うかつに睨みつけることもできやしない。

「くく、おまえとはツキアイが長いのに、お尻触ったのははじめてだな。

昔は知らないけど、今のおケツさいこーじやん。

女より弾力があって、肌の張りもあって、手に跳ねかえってくるみたいで、こんなぷりぷりなら、エンリヨしないでがつつり揉めるし。

ゼツミヨウに筋肉のついたおケツ、まじエロいわあー、ムラムラするわあー」

「ば、か、は、く、うう、女の、より、って・・・はう、あ、あう、そんな、強く・・・！」

片手で尻を揉みながら、もう片手を下のほうへ滑らせ、指を割れ目に食いこませた。

と、奥にのめりこまず、まえのほうに届くだけ指を伸ばし、股間をつんつんと。

まさに、調子をこいた痴漢が、尻から差し入れた指でちんこにイタズラしたのと同じ。

「はん、ああ、や、あ、く、だ、だめえ……！ふうあ、あ、ああ、あう、あん……！」

「ふ、ふふ、キンタマ、うしろからツツかれるの、気もちい？もどかしい？

ふうん、ちんこにイタズラしてほしくてたままないってか。俺に尻を振ってみせて、一丁前にオネダリしやがって。

ボクシングで大男を殴り倒す男子高生が、痴漢されて手も足もでず悶えるなんて、情けなくてやらしーの。

あれえ？こんなズボン張りつめちやって、勃起しちやったあ？

おまえ、男の手でイタズラされて、萎えるどころか、ちんこヨロコバセちやって、あら、まあ。

そんなエッチな体で女、抱けるのか？ほら、ほら、なあ？」

猫の顎を撫でるように、うしろから股間をこしよこしよされて「やあ、やあん、あああん・・・」と猫が甘えるように喘ぎながら、涙をぽろぽろ。

ヨガっているからだけでなく、友人の指摘が凶星だったものだから。

じつのところ、俺の真の悩みは、満員電車で男にイタズラされること自体でなく、痴漢されるようになって、異性の画像や動画を見ても、勃起しなくなったこと。



白無垢の

袴と

赤山辛鬼

との初夜

昔、村には赤鬼と青鬼がいたそうなの。

人を襲ったり食ったり犯したりはしなかったが、備蓄の食料を丸飲みしたり、畑を荒したり、家などの建物を壊したり、祭りで暴れたりして、ワルサばかりしていた。

いくら、直接、人に手だししないといっても、巨体にして怪力の鬼に、だれも物申せず、手だしもできず。

が、ある日のこと、畑の土を作物ごと掘りかえしていたところ「恥ずかしくないのか！」と叱りつける青年が。

「力ある者は弱き者に手を差し伸べるべきで、こうして自分の気まぐれにムダづかいをするなど、ただただ愚かしく恥ずべきことだ！」

彼は両親を亡くし、叔父をたよつて村にきたばかり。

鬼のことは聞かされていたとはおえ、初対面でコワがるよりも、叔父が懸命にたがやした畑が台なしにされ、怒り心頭になつたらしい。

もともとコワイもの知らずな性分でもあつたのだろう。

それにしても、命知らずだったが、赤鬼と青鬼は逆上しなかつたどころか「なんと人のくせに生意気な！」と痛快とばかりに笑つて、感心をしたよう。

以降、鬼たちはワルサをしなくなり、青年に云われたように、その頑

健全な体でもって、村の役にたち、人人を救うようになり。

かつて怯えるばかりだった村人たちは、しばらくもすれば、鬼の働きをありがたがり、崇めるようにもあり、神社を建てたなら「鬼神」として祀りあげた。

ところで、あの青年といえは、すっかり赤鬼と青鬼と親しくなり、ついには恋仲にまでなつて婚姻を結ぶことに。

まっ先に目にはいったのは、白い着物の裾を広げ、御開帳した足。その太ももを抱えこむ、足より肉付つきのいい赤い腕。

股間がなにかに覆われ、ぷちゅぷちゅしゃぶしゃぶ水音が立つに、フェラをさされているのだろうが、暗くて頭は見えない。

赤い腕はくつきり浮かびあがっているというに。

おそらく巨大な口が丸丸飲みこみ、すさまじい吸引力で絞めつけつつ、肉厚な舌をねっとり絡ませているのだろう。

元カノのフェラでも本番でも味わったことのない超越した快感に「は

あん、あう、あん、あん、ああん……」と無抵抗にだらしなくヨガ
つてしまふ。

と、股間のしゃぶりつきに気をとられていたら、乳首を爪で引つかか
れて「はあ、くう！」とびくんびくん。

いつの間にか、着物の衿を肌蹴させられ、青い手が胸を揉むようにし、
指で突起をくりくりして。

膝枕されているようなれど、やっぱり青い腕の途中までしか見えず、
胸元や顔は闇に溶けている。

股間を貪るようにむしゃむしゃするので、太い指で乳首をちまちまい
タズラする、その正体はきつと赤鬼と青鬼、鬼神たち。

とはいえ、肉体が減んで、魂も完全体でとどまっていなせいか、闇

夜にまぎれて、体の一部分しか覗かせていないよう。

それがオソロシイような「ふああ、あん、鬼神さまあ・・・」とぞくぞく興奮するような。

教頭と校長の色じかけバトル



俺が高校入学早々、校長が女子高生と援助交際していたとかで大問題となり辞任をした。

そのあとは高校の設立者の会長が、なかなか後任を決めず。

教頭が順当と思われたのが、会長がやっと決断をして、あらたな校長に選んだのは外部から引っぱってきた、ある経営者。

そりゃあ、教頭や教頭を支持していた人は不服だったものを、強権的な会長には逆らえないで、どこの馬の骨とも知れないよそ者を受けい

れた。

その間もなく、ご高齢の会長が脳震盪を起こし、意識不明に。

いつ亡くなってもおかしくない状況となり、校長グループは今の地位を堅固に守ろうとし、教頭グループはその座を奪おうと、対決を激化しているという。

まずは、まわりを固めるため、学校外の関係者に頭をさげ、揉み手をして回っているとか。

おかげで就任したばかりの校長に、生徒の俺らはまだお目にかかって
いなく。

名前は知っているものの、ネットで調べてもヒットしなく、謎のベールに包まれたまま。

教頭も、もともと学校外の活動が多く、まともに生徒は顔をあわせたことがなく、どういう人物なのか不明らしい。ただ、こんな噂が流れていた。

「二人とも若くぴちぴちのイケメンで、色男でもあるから、その美貌でもって男も女も教師たちに色じかけをし、自分のグループにとりこんだ」

舌なめずりした教頭は、近藤先生の腰に腕を回し引きよせると、自分の股間にぎんぎんの巨根が食いこむようにして「はう、あ、あん……」と腰をゆらゆら。

「はあ、はあん、は、こん、ど、せんせ、の、あふ、ああ、すき……
どでか、ちんぽ、ふあ、あん、かちかちで、きもち、い……あ、あ、
あ、あう、かち、かち、しゅ、き、ひあ、あん、あん、ちんぽ、しゅ
きい……」

高嶺の花の美麗な教頭が、幼子のように甘えて舌足らずに「ちんぽ」「しゅき」と繰り返えし、自分のちんこにすりすりしている……。

なんとか理性を保って、腰をとどめつつ、頭を沸騰させ鼻血をぽたぽた。

ただ、体は正直で、ジャージをさらに膨らませると「やあん、まだ、おつき、なるの・・・？」と眉尻を下げ、教頭はややトマドイ。

びくびくするように腰を揺らして、そのうち高級スーツのズボンが濡れて、水音が立ちだすと、かあつと顔を赤らめ「やだ、恥ずかし・・・と涙をぼろり。

「かちかち、ちんぽ、しゅきい」と男の股間に、自ら股間を寄せて、扇動的に揺すっていたくせに。

「吉原、きみは、お高くとまって生徒を邪険にしているくせに、どうして、こう、体にびったりした、しかも色のうすいシャツとズボンを着るのかな？」

これでは乳首も股間も浮き彫りになって、逆にセクハラで、生徒に悪影響をあたえるだろう。

ほら、縄に擦れるだけで、赤く腫れた乳首が透けているし、ここなんかは、みるみる染みが広がっているぞ」

「はっ、くう、この、へんた、あんた、こそ、校長の、くせにい．．！」

縄に絞めつけられる股間からちゅくちゅくと水音を立てて、喘ぎ交じりに罵れば、指でなぞるのをやめて。

体に触れないよう接近し、耳元に笑いを含んだ囁きを。

「とくに、きみ、男子生徒はあまりに低能で卑俗だから、まともに話すに値しないと偉そうにほざいて、避けているよな？」

でも、こんな透け透けの服を着て、乳首とちんこを見せて、発情しっぱなしのアホな猿のような男子生徒を挑発しているんだろ。

軽蔑する男子生徒に輪姦されたいなんて、教育者にあるまじき、外道な淫乱だな？」

「吉原？」と熱く吐息され、腰をびくびく、縄を軋ませ、濡れに濡れたズボンをぬちゅぬちゅ。

首をふり「はう、う、ん、ちが・・・！」と否定しつつも、体をくねらせてやまず。



会社の汚職事件に巻きこまれて、責任と罪を背負わされ切りすてられた俺は、社会に絶望してホームレスに。

冬の骨まで凍えるような日、公園の藪のなかで、死にかけのように寝ていたら「あれ？花山じゃないか？」と声をかけられて。

高校の同級生で、名はたしか住原。

俺の惨めな境遇について、とくに聞いてくることなく「いやあ、ちよ
うどよかった」とある話を持ちかけた。

「今、急募で助手を探しているところだったんだよ。」

事務所で住みこみしていいから、花山、暇そうだし、やってくんない？」

「暇そうだし」の一言で片づけられたのが、かえってせいせいして首肯。

事務所にいき、シャワーを浴びて落ちついてから知ったことには、住原は探偵業をしていると。

しかも主にラブホで起こる事故や事件を扱っているらしい。

ラブホでは日々、なにかしらのトラブルが発生。

個人的なものならともかく、裏社会の人間がいり乱れての諍いや陰謀もあるから、対処が一筋縄でいかない。

ボディソープのぬるぬるを指にまとわせて、ちゅつくううと体内に入。

エッチ用品だから、ローション代わりにするのか。

それにしても、尻をいじる趣味のない俺にして、初体験がまるで抵抗感も不快感もなく。

ちゅくちゅくかき回され、ちゅばちゅば広げられるのに「や、やあ、やあん、あひい・・・」と腰をくねらせ、住原に抱きついたまま、ぬぶぬぶ胸をすり寄せて。

「ほら、息をするの忘れるなあ。のぼせてぶっ倒れるぞお。」

だいじょうぶ、だいじょうぶ、これまで仕事で、何人もの男も女も指でイカせてやっているから」

「何人もの!?!」「男も!?!」「イカせる!?!」と頭はパニック祭りになるも、住原の探偵(?)テクニクに、体はウレシガルばかり。

腫れた乳首を、あんあんすりすりするのが、もろバレて、恥ずかしいような、でも、住原の乳首も立ってるのが分かって、はあはあ涎が垂れるような。

遠ざける、ちんこは放っておかれて、先走りがだだ漏れとはいえ、さすがにノータツチで射精はムリだろう。と、思っていたのが。

「やはあん！しょこお・・・！」と背中に爪を立てたところで、弱点を二本指でずつちやずつちやずつちや！猛攻。

「あ、だめ、だめえ、だめってえ、住、原あ、おれ、ああ、俺え、お尻で、いくの、ひい、あ、あん、あん、あふ、や、やあ、やだあ！探偵、なら、推理し、ろお、やん、んあ、あ、ば、かあ・・・！」

